

# 公園をみる・観る

## カブトガニは頑張っている

～もぐりたいけど、もぐれない～

観察ホールの隅っこに幾つかの水槽が展示してある。水槽の中には、カダヤシ、ギンブナ、エビ類などが毎日来館者を相手に「お・も・て・な・し」に励んでいる。彼らの中でも一番来館者の目を引くのは姿がユニークなカブトガニではないだろうか。ほとんど円形に近い体形で、お尻には体長の3分の2くらいの長さの尾剣を持っている。こ



の尾剣はなかなか便利なもので、泳ぐときには舵となり、砂に潜れば並行器の役目をし、敵に対しては体を大きく見せることで威嚇できる。最もほほえましい利用方法は何かの拍子に仰向けになってしまったとき尾剣をテコにして起き上がることも出来るらしい。しかし厄介なこともある。以前同居していたアサリが尾剣に食いつき、カブトガニは心ならずもアサリと道行きするはめとなった。もっとも、アサリがたまたま口を開けていたところに、カブトガニが通りかかり、慌てて口を閉じたアサリがカブトガニの尾剣を挟みこみ引きずられていたと言うのが真相のようだが

カブトガニについて特記すべきことは生きていた化石と呼ばれ2億年前からほとんどその姿が変わっていないのだそうだ。ゴキブリと同じだといえどどちらに「失敬」にあたるのかな。また成体は雌雄がほとんど行動を共にする。大きな雌の腰(?)に少し小ぶりの雄がしがみつきどこへ行くのも雌雄縦列行進、何をするのも一緒だそうだ。それを聞いた若いカップルは「うらやましい！」と黄色い喚声を挙げ、星霜経たカップルは「鬱陶しい！」と眉間の皺を深める。公園にいるのは生後10年余しか経っていない体長15cm(尾剣の長さは別)くらいの幼い子供たちと独り者の雄なのでこうした人間の気持ちとは無関係。

水槽のカブトガニを良く観ると脚の先端部分に青いコケが付着している。彼らはもともと砂に潜って生息する。砂の中を移動すれば体に付いたコケや異物も取れやすいが砂の少ない公園の水槽では「もぐりたいけど、もぐれない」から体にコケが付着してしまうとのこと。もぐる事の好きなカブトガニはもぐらずに来館者のおもてなしに務めている。

近年、カブトガニも生息数が減少し絶滅危惧種とされている。カブトガニの血液は、エイズや敗血症の治療に応用できるという研究も進んでいるそうだが、何よりも2億年前から変わらぬユニークな姿で私たちを和ませてくれている彼らを観て和んでみませんか。

(土×土)